

キャサリン ブロック カナダ出身の元キリスト教徒（上）

:

明:

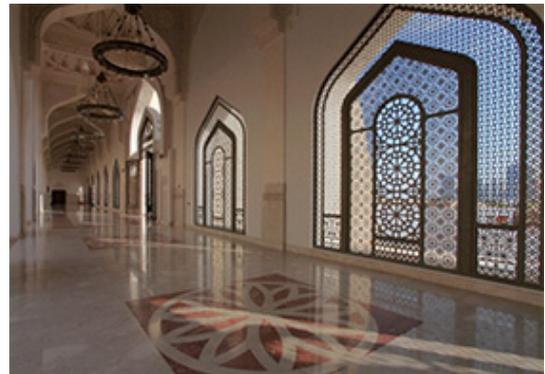
教 ある女性が、イスラ ムについて いたことと どのギャップ、そして神の存在について苦 します。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: キャサリン ブロック

日 2 Jun 2015

集日 13 Jul 2015



私はこんなところで何をしているのでしょうか？

私は、礼 中に と鼻を床に押し付けながらそう思っていました。膝 は痛むし、 への重み
を和らげようとする 腕の筋肉も突っ っていました。 で礼 している人の奇妙なつぶやき
を耳にしました。それはアラビア で、彼らはそれを理解しますが、私にはできません
。そのため、ムスリムになって か12 目の私は、神がそれを き届けてくれることを望み
つつ、 手なことをささやきました。「神さま、私がイスラ ムに改宗したのは私があな
たを信じているからで、イスラ ムが理にかなったものだと思ったからです。」そのと
き、自分が言ったことが信じられませんでした。 が止まりませんでした。 ひざまずき
、床に鼻を押し付けている私のこんな姿を友人たちが目にしたらなんて言うでしょう
か？

彼らは笑い ばすでしょう。彼らは、私の は かか いてくるはずです。「あなたは宗教的

「なったとでも言うの？」宗教的 去に、私は思弁的な 神 者であることに 足していました。どうして私は信仰するムスリムになったのでしょうか？

私は自 していました。私は 去に思いを せ、自分がたどった道のりを思い出そうとしました。それは一体どう始まったのでしょうか？

それは多分、 践的なムスリムに始めて出会った からでしょう。あれは1991年、カナダのオンタリオ州、キングストン市のクイ ンズ大学での出来事でした。

私は偏 のない、 容的で、リベラルな24 の女性でした。インタ ナショナル センタ 付近をくムスリム女性を目にすると、可哀想に思えました。彼女らが抑 の 象であるということを知っていたからです。彼女らになぜ の毛を覆い、夏 でも 袖を着、ムスリム 国で い仕打ちにあっているのか ねたところ、「ベルをまとっているのは神がそう求めているから」と答えたため、彼女らへの哀れみの念は すばかりでした。ムスリム 国での仕打ちについてはどうなのか いたところ、それが彼らの文化だということでした。私はこうした女性に しての邪 な 遇について、彼女らが惑わされ、幼少の から社会的に洗 されているのだと 信しました。しかし、私には彼女らがとても幸福そうで、友好的かつ であるようにも えました。次に、ムスリム男性をインタ ナショナル センタ で かけました。

「テロリストの地」リビア出身の男もいました。彼を た は、「神の名のもとに」私に何かしてこないかと身震いしたものです。神の名のもとに、暴 の中ブッシュ大 の写真を燃やすアラブ人たちの姿をとらえたテレビの映像を えています。大 な神を持ったものだ、と私は思っていました。神は我々弱い人 を 人化したものに ぎないということを信じていた私は、そんなものを信じれる人々がとても可哀想だとも思いました。しかし、彼らは非常に友好的なことに 付きました。彼らは人助けが大好きでした。彼らからは平静のオ ラが て取れました。一体どのような信仰を持っているのだろうかと思いました。しかしそれには困惑させられました。私はクルア ンを んだことがあったものの、そこからは何も特 なものを いだせていませんでした。それは湾岸 争当 です。一体どのような神が、人々を 争に り出し、他国の の市民を し、女性たちを暴行し、米国にしてデモをさせるのだろうかと思 疑 に思っていました。

彼らがその行いを代行していると主 させる、その神の なる を んでみるべきだと私は思いました。信 できるペンギンクラシックス（ロンドンの出版社による教 ）を んでみると、あまりにも酷い内容で み えることができませんでした。そこには なる者のための 女たちのいる天国（ なる女性は天国で 女たちとどうすればいいというのでしょうか）、そして数々の都市を破 する神がいました。

女性が抑 されているのも当然だなと思いました。これらの狂信者たちはあちこちで米国旗を燃やしているのです。ただ、そのことをムスリムたちに すと、彼らは困惑します。彼らのクルア ンにはそのようなことは かれていないというのです。私が んだものは だらけだったのでしょうか？

突然、私と一 に礼 している人が立ち上がりました。私は彼女に追 しているので、一 に立ち上がるものの、 いスカ トを踏んづけてしまい びそうになりました。 を抑えようと鼻をすすりました。神への礼 に集中しなければなりません。神よ、私がここにいるのは私があなたを信じているからで、キリスト教 ユダヤ教 イスラ ム ヒンズ 教 シク教 教の研究においてイスラ ムが最も理にかなっていたからです。

手を 膝に置いて屈みこみ、お辞 の姿 になって、 を持ち直そうとしました。神よ、私を良きムスリムにしてください。「ムスリムですって？
キャサリン、教 ある西洋の白人女性であるあなたが、女性を二等市民に格下げするような宗教に改宗するなんて一体どういうことなの！」

でも、キングストンのムスリムたちは友 になってくれたのです。彼らは することなく、コミュニティに温かく私を迎え入れてくれました。私は彼らが抑 されたテロリストであることを忘れませんでした。それが私の旅路の始まりだったと言えるでしょう。しかし、私はまだ 神 者でした。あるいはそう思い んでいました。

私は星のきらめく夜空を眺め、宇宙について考察しました。ダイヤモンドのような星々は、暗い夜空をつらぬく神秘的なメッセ ジを私に送っているかのようでした。私は自分の存在よりも大きなものをつながったような がしました。それは人 の集合的意 だ

ったのでしょうか？

平 と静寂が星々によって ばれてきました。私はこうした感情をねじ曲げ、より大きな存在、より大きな意 などないと宣言すべきでしょうか？ 「神の存在について疑ってみたことはないの？」 私は信仰するキリスト教やムスリムの友人たちにこう いたものです。彼らは「ない」とこたえました。ない？？ それは私を困惑させました。

神の存在って、そんなにはっきりとしたものなの？ なぜ私にはそれが分からないの？ 私にとって、それは想像力の でした。どこか遙か くの存在が、私の生活に影 を与えているというのです。いかにして神は、何十 もの人々の祈りを き届け、人 の人生の 秒を司るといのでしょうか？

そんなことは不可能です。それはいわゆる「造物主」なのかもしれませんが、人に干渉するはずがありません。世界中で起き ける不正についてはどうだといのでしょうか？

子供たちも 争で されています。正 の神がそんなことを すはずありません。神は理解不能でした。神が存在するはずなどないと思っていました。私たちは 化したのだから、造物主という概念も除外しなくてはなりません。

私たちは再び跪き、私は鼻をすすりながら、新しい 色の礼 用敷物の上で、自分の指を していました。この礼 用敷物は私のお に入りです。それは滑らかな肌触りで、 の背景に紫のモスクが刺 されています。そこにはモスクの い入り口へと く道があり、私を招き寄せているかのようです。モスクの入り口には、ぼんやりではあるものの、 固たる真理があるかのようです。私はそこの入り口に招かれて幸福です。

私は幼い に世界地 のジグソ パズルを持っていました。それは学部生の3年目か4年目の にバラバラになってしまいました。キングストンで、私は一 は定期的に教会に通って いました。そこへ行くことは多少 ずかしいことでもありました。宗教的な人々は感 的 だったり、 わりだったり、古 で退屈な人々ばかりだったということもあります。しかし、当 は神の存在も自明のものと思えました。宇宙は全能である 造主なくしては全く 意味をなしませんでした。

教会から 離れる は、身が 軽くなり、幸福感がありました。そうした 持ちはもう失ってしまったと思えました。それは、今はもうなき神との 交わりを できていたからなのではないでしょうか？

以前には、それが旅路の始まりだったのかもしれませんが。私はその 交わりも祈ろうとはしましたが、 次第に 困 になっていました。キリスト教徒は、主イエス キリストを信じない者には 破 滅の 命が待ち受けていると主 張 します。しかし、イエスについて 聞いたこともない人々や、他の宗教に 信じている人々はどうなのではないでしょうか？

また、キリスト教はイヴが 罪を受けたことから、社会的には女性が劣った存在だと 史的に 主 張 してきました。女性は勉学、投票、土地の所有から阻まれてきました。神は 全く 白い髭をたくわえた、恐ろしい老人でした。彼とは 交わりすることができませんでした。私はキリスト教についていけず、それゆえ神は存在しないことにしてしまいました。

しかし、私は神を信じるフェミニストや、フェミニストのキリスト教徒女性、またイスラ ムは私が信じていたような信条を持ってはいないことを主 張 するムスリム女性などと出会いました。私は祈り始め、自分自身を「キリスト教 のフェミニスト信仰者」と呼ぶことにしました。

この 事 のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/1824>

著作 2006-2015 断 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 断 を禁じます。